
ARCADIA ver1.00 **港町スティアルフ**

Wiz Craft

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A R C A D I A v e r 1 . 0 0 港町ステイアルーフ

【Nコード】

N 8 9 9 3 R

【作者名】

W i z C r a f t

【あらすじ】

ステイアルーフの街並はバーチャル・リアリティによって具現化された世界です。ですが、決してその歴史はただの作り物ではありません。街の外壁にこびり付いた染みや傷跡はオープン からプレイヤーが刻んできた軌跡なのです。街の時計台もまた、そんな歴史に一役を添えてきた大切なシンボルです。 §メインプレイヤー§

M i k e y , J a c k , A i n e , K i t t y §ログ方式§

W o r l d V i e w

マリソフフラワー号の船上での優雅な生活。日中はプールで遊泳を楽しみ、夜はカジノで賭博。

そんな豪華絢爛な船上生活も三日目の夕方になると、遂に幕を閉じようとしていた。

船上での最後のディナーを迎えた四名は馴染みのCREWS x CREWSでバイキングを楽しみながら、夕闇の海原の向こう側に浮かび上がる巨大な大陸の影を眺めていた。

その雄大な姿に、食事の手を止め魅入る一同。

「あれがレクシア大陸か」と止めていたナイフを動かし肉厚の夜子羊のステーキを頬張るジャック。

「見て、明りが見えるよ。あれがステイアルーフの街並みかな」

アイネの言葉にキティは小さな身体を伸ばし島影に灯る小さな灯火の集まりを瞳に映す。

マイキーは赤ワインを口に含みながらただ黙って、船上からの光景に視線を流していた。

この世界を訪れてから既に色々な事が有り過ぎて、彼の中ではその想いの整理も付かない部分も大きかったが、そんな心境とは裏腹に新大陸はもう目前まで迫っている。

レクシア大陸では一体どんな出来事が楽しませてくれるのか、遠目に映っていた島影に想いを馳せる一同。

汽笛が高らかに鳴り響いたのはそれから三十分後の事だった。到着を知らせる機械音声のアナウンスが船内に響くと、船上での最後の食事を終えたマイキー達は第一甲板へと階段を下る。

甲板は船を降りる客で溢れていた。

次第に大陸が近づいてくるに連れ歓声を漏らす乗客一同。その島

影は明確な形を持ってその姿を現す。外景もいつしか移り変わり港街の風景を映し出していた。

夜港には赤煉瓦の倉庫が立ち並び、そこにはマイキー達が乗っているものと同型の船が幾船も停泊していた。港の先には驚く程の規模の街並が、それはエルムとは比較にならない広がりをもって乗船している冒険者を大らかに待ち構えていた。

汽笛と共に緩やかに停止する船。ステイアルフの港と繋ぐ降客路が設置されると千人を裕に超える冒険者が意気揚々と港へと降り立ってゆく。

港への降客路を歩きながら、一行は赤煉瓦の倉庫が並ぶ港へと降り立つ。石畳が敷かれた港の足場を踏みしめるとふとアイネが声を上げる。

「あ、港の中に露店があるよ。限定モデルの香水の販売だって」

港には様々な露店が立ち並んでいた。

駆け寄るアイネの後姿に苦笑するマイキーとジャック。手招きするアイネにキティは駆け寄ると、二人で露店に並ぶ香水を吟味し始める。

「eau de toiletteか。Aqua Horseだつて。爽やかな香り。でもこれ男性用かな。どう思うキティ」

お試し用に展示されている瓶を手を取ったアイネは袖に一振りすると、キティに腕を差し出して見せる。その爽やかな匂いを嗅いだキティは「いい匂いです」とにっこりと微笑む。

「ね、いい匂いだよね。女の子でも大丈夫かな。とりあえず他の露店も回ってみよ」

はしゃぐ女性陣を前にマイキーとジャックも露店を流し見しながら、ふとその一角で足を止める。

「銅の細工物か。銀細工じゃないんだな」と呟いたマイキーは徐に露店台へと近付いて行く。

台座に並べられたその数々の首飾りや指輪は全て銅で象られている。

二人は展示用の指輪を手にとると彫られたその紋様を一つ一つ確認し始める。剣が刻印されたものから、繊密なステイアルーフの街の風景が刻まれたもの、また海洋の花、マリンフラワー号が描かれたものとその彫り柄は多様だった。

「一つ150ELKか。結構痛いよな。くそ、カジノで摩らなけりや」

そんな呟きを漏らすジャックを横目にマイキーは素早くキーボードを弾くと、美しい剣が刻印された指輪を嵌めて見せた。

「お前買ったのかよ。剣の刻印……俺もそれ欲しかったんだよな」

愚痴るジャックに苦笑を向けながらマイキーは視線で立ち去る合図をする。

相変わらず露店に夢中になっているアイネ達を呼び寄せたマイキー達は、港の出入り口に立てられた鮮やかな虹色のオラクルゲートに向かって歩を向ける。

「まだ街の中に入ってすらいなのに、これじゃ先が思いやられるな」とマイキー。

「先に宿にチェックインしようぜ」

ジャックの言葉にマイキーが「その方が無難だな」と呟き、一行はオラクルゲートを潜り虹色の波紋を浮かび上がらせる。

この街の大体の地形は把握しているつもりだった。逆U字型になった港を西側から北側へ歩き、まずは繁華街がある大通りへと向う。海側から船が出入りする東西二筋の船着場、その渡し場が交わる波止場から北側に向かって伸びたその一本道が繁華街である。繁華街を真っ直ぐに北へ向えば中央広場と呼ばれる大きな広場に出る筈だ。目的の宿屋 B & a m p ; B はそこにある。全てはマイキーが下調べしたオープン段階の情報だった。

情報通り、港は繁華街の存在する大通りへと繋がっていた。ただ唯一情報と異なっていた点は、オープン段階に対して拡張されたその圧倒的な店舗数。

オープン 時で二百メートル程と書き込まれていたその繁華街通りはどう見ても記述の長さを裕に超え、長く見積もれば一キロに到達するのではないかと思われる程だった。

その区間に渡って軒並み連ねたその両サイドの店舗に挟まれた道幅は人が往来するには充分な幅がある。屋外では珍しい事に中央分離帯を挟んで左右に動く舗道オートウォークが設置されており、冒険者の移動をサポートしている。舗道の中央には美しい花壇が断続的に設置されており、花壇脇の両側には花壇の彩色に合わせたベンチが置かれている。

マイキー達は大通り西側の北へ流れるオートウォークに踏み込みゆっくりと流れてゆく店舗を見つめながら談笑を楽しむ。

「屋外のオートウォークって珍しいよな。雨降ったらどうすんだこれ」とジャック。

「お前いつの時代に生きてる人間なんだ。今時、水に濡れて故障する機械なんてどこにあるんだよ。勿論、耐水性か。街全体に撥水性シールドでも張ってるんだろ」

マイキーの言葉に顔を覗きこむアイネ。

「撥水性シールドって、ニューヨークでは実際に一度実験に成功してるのよね」

「街の上空を覆う空気そのものを巨大な振動子として、超音波振動を発生させる。この技術自体は既に実験段階じゃなくて完成されるんだ。ただし、これを実用化するには莫大な資金が必要になる。雨が降る度に日本の国家予算クラスの金が飛んでいくんじゃ、とても実用的とは言えないさ」

そう言っつて空を見上げるマイキー。

「だけど、ヴァーチャル・リアリティの世界ならば話は別だ。ここでは現実で必要になる資金の運用なんて考えなくていい。原理さえ完成していれば、物理プログラムで忠実に再現する事が出来る。だからこそ、ここは理想郷なんだよ」

マイキーの言葉を必至に理解しようとしてじつと彼を見上げるキティ。

「キティにはちよつと難しい話だよね。分からなくても大丈夫だよ」

アイネの言葉に首を振って真剣な眼差しを浮かべるキティ。

それはキティなりに、マイキーの特別扱いしないという言葉を真剣に考えた結果なのだろうか。

長いオートウォークを抜け繁華街から飛び出した四人の視界には今、広大な敷地が広がる。

向かって正面には真白なまるでギリシャの宮殿のような白壁の建物が聳えていた。その前には美しい噴水が広がり、冒険者達の憩いの場となっているようだった。

「あれがギルドか。随分とでかいな」

巨大な建造物を前に中央の広場では幾人かの冒険者達が武器を重ねて闘う姿が見られた。

美しい紋様は地面に刻まれた特殊なバトルフィールド、ここがオプン段階でも話題だったPVPエリアに違いない。

PVPエリアから北東の空間には、市場のようなテント小屋が多く散見出来た。そこは恐らく屋台市。この大陸の様々な食材が並び、実際に調理された料理の数々を破格の値段で楽しむ事が出来る。

そして、正面のギルドと同様にそのPVPエリアを囲むように西に聳える黒光りする建物がコミュニティセンター。

この世界では冒険者達はコミュニティと呼ばれる気の合った、又は目的を共にする同志と徒党を組む事が出来る。コミュニティを結成すると冒険者はこの街では様々なサポートを受ける事が可能で、その最も重要なサポートを行う施設がこのコミュニティセンターである。ここでは冒険者にコミュニティ専用の部屋を提供しているのだ。

そして繁華街から向かって東側に位置する木造で組まれた建物。とはいえ、エルムの藁小屋とはその外観はまるで異なる。十九世紀の西洋建築を思わせるその美しい構造は見る者を魅了して止まない。その素朴な雰囲気は庶民的で在りながらも、伝統芸術品のような美しさを秘めている。何よりも特徴的なのが建物の尖頭に取り付けられた大きな時計台である。ギリシア数字で飾られた時刻を長短の黒針が緩やかに時を刻む。ここがマイキー達が今夜寝宿と定めたB&Pである。

街の探索はいつでも出来る。まずは慣れない長い船旅で疲労の溜まったこの身体を癒す事が先決だ。

中央のPVPエリアの周囲で一際大きな歓声が上がる。

魅惑的なプレイヤー達の火花に誘われて、ちょっとくらいは見ていくか。

そんな光景がここには五万と広がっているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8993r/>

ARCADIA ver1.00 港町スティアルーフ

2011年3月29日06時56分発行